

# 子どもが言葉や挿絵から想像を膨らませることを楽しむ授業 — 1年生「くじらぐも」を用いて—

Class that Children Enjoy Expanding Their Imagination from Words and Illustrations :  
A Case of the Grade 1 Unit “Kujiragumo”

佐々木 智子\*・徳永 加代\*\*

Tomoko Sasaki

Kayo Tokunaga

## 要 旨

第1学年の国語科「くじらぐも」の実践において、主体的な学びのための「音読と動作化」、対話的な学びにつなげる「ひとり勉強」、そして、深い学びを促す「振り返り」を取り入れた。その実践の記録から、子どもたちの考えがつながり、それによって子どもたちの読みが深まっていったことを確認できた。そこでは、子どもたちが作品の言葉や文から想像を膨らませ、その想像したことを自分の言葉で表現し伝えようとする姿も見られた。

反面、子ども個々の考えや読みのこだわりを教師が捉えられていない場面があったことも確認でき、今後の授業改善の課題としたい。

## 1. はじめに

1年生の国語科では、「お話を読んで、言葉や挿絵から想像を膨らませることを楽しむ子」になってほしいという願いがある。入学して間もない頃の子どもたちに絵本の読み聞かせをすると、絵を見ながらお話の世界を素直な心で楽しむ様子に出会う。言葉の響きやリズム、繰り返しのフレーズを自分でも繰り返し発して楽しんでいる。また、「ピョーン」「ひょいっと」など登場人物の様子を表すためのぴったりの言葉を、自分の経験の中から見つけ出し伝えようとする。国語の授業では、このような子どもたちの素地をさらに豊かなものにしていきたいと考える。

そのために、まずはしっかりと音読ができるようにしていきたい。声の大きさや抑揚、間、言葉の響きやリズム、言葉の表す様子や気持ちに気を付けながら、場面に合う音読（表現）を目指していく。次に、お話に出てくる言葉の中で、想像を膨らませるために大事な言葉に着目できるようにしていきたい。時や場所を表す言葉、様子を表す言葉、感情を表す言葉、そして繰り返し出てくる言葉など。このような言葉を丁寧に捉えることができるようになると、場面の様子や登場人物の気持ちをより豊かに想像することができるだろう。最後に、自分の思いや考えを伝えるために、ぴったりの言葉（表現）を見つめられるようにしていきたい。子どもたちのこれまでの経験や挿絵の力を借りながら、お話に出てくる言葉を確認なものにしていく。そうすることで、子どもたちの持つ言葉を増やし、伝えたいことが正しく伝えられるようになるだろうと考える。

## 2. 単元の概要

- ① 単元名「こえにだしてよもう」
- ② 題材名「くじらぐも」(1年生 光村図書 下巻)
- ③ 指導目標

\* 帝塚山小学校 教諭

\*\* 帝塚山大学教育学部 准教授

- ・場面の様子を想像し、その様子が表れるように声に出して読むことができる。
- ・言葉や文、挿絵から、場面や登場人物の様子や気持ちを想像することができる。
- ・お話を読んで想像したことを、自分の言葉で話したり書いたりすることができる。
- ・かぎ（「 」）の使い方を理解する。

#### ④ 作者の中川李枝子さんについて

「くじらぐも」は、中川李枝子さんが、光村図書の教科書に掲載するために書き下ろしたお話である。17年間、保育士をしていた中川さん。「いやいやえん」「ぐりとぐら」「なぞなぞえほん」など、数多くの著書があるが、この小学校一年生の教科書に掲載するお話を書くにあたっては、まずは一年生の子どもたちを知らなければと、一年生の子どもたちの観察、研究から始め、まる一年の月日を費やしたそうだ。「くじらぐも」のお話を書くにあたって、中川さんは、ご自身の著書「ママ、もっと自信をもって」の中で、次のように綴っている。

教科書への掲載を受けたときに、非常に悩みました。依頼をされたのは、文字を覚えただけの子どもが音読をする「暗唱教材」でした。ただの本なら気に入らなければ読まないですむけれど、教科書は読まないわけにはいかない。(中略)「あいうえお」がおぼつかない子も、声に出して読む楽しさを覚えて、国語が好きになってほしい。そして「学校が大好き、お友だちも先生も大好き」になってほしい。(中略)「私なりに考えた条件は、まず面白いこと。つまらなければ子どもは読む気がしません。男の子と女の子を公平に扱う、全国の小学生が読むのだから地域や気候が偏らない、などと考えているうちに、体育の時間、校庭の空にくじらの形の雲が浮かぶ話になりました。(中川李枝子、『ママ、もっと自信をもって』、日経BP社、2016. 4.14)

お話を書く中川さんの前には、常に「お話を楽しみ、喜んでいる子どもたちの姿」があるように感じる。そして、子どもたちの姿を想像しながらお話を書かれている中川さん自身も、楽しまれているように思う。

中川さんの他の作品として、光村図書教科書掲載の「あさ」「いちねんせい」、スタジオジブリ作「となりのトトロ」の主題歌「さんぽ」の歌詞がある。これらに共通して想像できるのは、

- ・果てしなく広がる青い空
- ・きらきらとした笑顔で上(空)を見上げる子どもたちの顔
- ・元気いっぱい活き活きとした子どもたちの姿
- ・純朴な子どもたちが持っている、これから生きていく未来への希望

である。小学生の頃、戦争を経験された中川さんは、「校庭でのびのび体育ができるのは、平和の象徴」と考えておられる。中川さんのお話づくりには、「平和な世界で、元気いっぱい希望にあふれて楽しんでいる、喜んでいる子どもたち」への思いがあふれているように感じる。

#### ⑤ お話「くじらぐも」の魅力について

「四じかんめのことです。」と一気にお話の中へ引き込まれていく書き出し。「一ねん二くみの子どもたちがたいそうをしている」という、読んで一年生の子どもたちにとって、身近な世界。「あっ、体育の授業をしているのかな。」と現実の自分たちと重ね合わせることだろう。ところが、「空に、おおきな くじらが あらわれました。」と、いきなり幻想の世界へと子どもたちを連れて行ってくれる。読んでいる子どもたちの「え〜っ!」という驚きの声わき起こるのが浮かぶようだ。

わずか4行読み進めるだけで、味わうことができるわくわく感。と同時に広がる「空に、くじら?」「くじらがあらわれる?」と何とも不思議な世界。その後も、くじらも体操をしたり、しゃべったり。そして、いきなり風が吹いて雲のくじらに飛び乗ったり空を旅したりと、子ども

たちは、小学校一年生という等身大の登場人物に、自分を重ね合わせながら読み進めることができるだろう。重ね合わせた子どもたち自身が、登場人物になりきり、現実の世界から幻想の世界へ、そしてまた現実の世界へと導かれていく。その中で絶えず味わうワクワク感。このお話の最大の魅力は、ここにあると感じる。

また、お話の中に出てくる会話文は、ついつい声を出してしまうものばかりである。特に、一年二組の子どもたちとくじらが、まるでやまびこのようにまねっこする文。「おうい。」「ここへおいでよう。」は、地上にいる子どもたちと空にいるくじらの距離感を自然とつかむことができるような文である。また、「天までとどけ、一、二、三。」「もっとたかく。もっとたかく。」の繰り返し。これもまた、自然と子どもたちが声を大きくし、力を込めて読んでしまうフレーズ。

こういったお話の中に出てくる一つひとつの言葉やフレーズが、一年生の子どもたちが自然と場面にふさわしい読み方（表現）ができるようにし、想像を膨らませることができるようにしてくれている。だからこそ、このお話を読み終わった後も、子どもたちの心に残っていくのだと考える。

さらに、このお話に登場する登場人物。一年二組の子どもたちと先生、そして、くものくじら。幻想の世界だが、空にくものくじらを見つけて、「飛び乗ろう」と言った一年二組の子どもたちの姿は、そんなことを言い出す子が、現実の一年生でもいておかしくない。そして、みんなで「そうしよう、そうしよう」と楽しい世界へ飛び込んでいく姿も、まさに実際の一年生の子どもたちそのものの姿である。そして、「みんなでまるいわにな」ってジャンプする子どもたち。誰一人外れることなく、みんなで一緒に楽しんでほしいという、作者の思いが表れているように感じる。

「くものくじら」からは、大きくふわふわとした印象を受ける。そして、まねっこをしたり自分の背中に乗せてくれたりと、何とも愛らしい一面と頼もしさを感じる。また、教科書の挿絵のくじらぐもが、可愛らしい。低年齢の子どもたちが好むだろう「大きくてやわらかい存在」が子どもたちを惹きつけてくれることだろう。

### 3. 指導の工夫

#### ① 音読と動作化

「くじらぐも」のお話は、自然に子どもたちが声を出したくなったり引き込まれたりする力がある題材である。そこで、まずは、声に出して読むことを楽しむ。場面に応じて、音読の仕方も変えていく。例えば、一年二組の子どもたちが声をそろえて言うフレーズは、声をそろえて読むことができるように役割読みを取り入れる。みんなが声を揃えて言うことで、力が湧いてくる感じを体感することもできる。また、音読をしていくうちに、子どもたちは、自然と動き出したくなる。一年二組の子どもたちになりきり実際にやってみる（図1、図2）。一年二組の子どもたちの心とつながっていく。そして、またお話に戻っていく。お話に出てくる言葉ではどのように表されているのか、どの言葉の時にどんな様子だったのか、どんな気持ちだったのか想像を膨らませることにつながっていくと考える。



図1 「みんなで手をつないで大きなわになる」  
場面の動作化



図2 図1の際に出ていた雲。これを見た子どもたちは、「あっ、くじらぐも」と想像を膨らませる。

## ② ひとり勉強の工夫

お話を読む際に、まずは子どもたち一人ひとりがお話と向き合う時間を設ける。お話と対話をしながら、想像を膨らませていく大事な時間である。ひとり勉強の際には、ノートを活用して、子どもたち自身が自分の考えを表現できるようになってほしいと考えている。しかし、何をどのように想像して書いていけばよいかわからない子どもたちにとって、初めからノートでのひとり勉強は難しい。そこで、ひとり勉強の時間を設けて学習を進めた初めての題材「おおきなかぶ」では、ワークシートを活用した。子どもたちが登場人物の心の声を想像しやすいように、吹き出しの中に書き込める形式のものである。「くじらぐも」の学習では、一場面・二場面は、この流れでひとり勉強を進めたが、三場面では、吹き出しをなくし、より書かれている言葉や文に着目できるようにしていった（図3）。

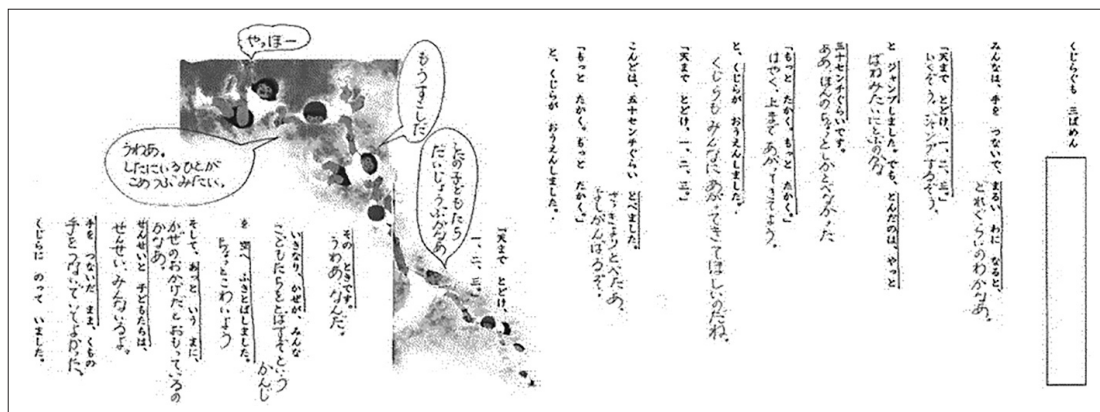


図3 三場面のワークシートの記入例

## ③ 振り返りを書く

子どもたちは、協働学習を進めながらも、お話や自分自身と対話を繰り返し、想像を膨らませていく。しかし、十分に自分の思いを伝えられないまま、授業が終わってしまうことも少なくないだろう。そこで、協働学習の時間の終わりに、振り返りを書く時間を設ける。そうすると、協働学習の際に、自分自身が友達のお話を聴きながら、どのようにお話を想像していたのか、どんなことを考えていたのかを見つめ直すことができる。

## 4. 指導計画（全13時間）

第一次 物語の全文を読み、物語のあらすじをつかむ。（3時間）

- 範読を聞き、物語と出合う、新しい漢字の読み方の確認と場面分け、音読…（1）
- 言葉の意味の確認…（1）
- 全文を読み、わくわくしたところ、好きなところ、不思議に思ったところなど、初めの感想を書く。…（1）

第二次 場面や登場人物の様子や気持ちを想像する。（10時間）

- 一場面：子どもたちとくものくじらとの出会い…（2）
- 二場面：誘い合う子どもたちとくじら…（2）
- 三場面：くものくじらに飛び乗ろうとする子どもたちと応援するくじら…（3）（本時3/3）
- 四場面：空を旅する子どもたち…（1）
- 五場面：くじらぐもと子どもたちの別れ…（2）

## 5. 本時

### ① 本時の目標

- ・くものくじらに飛び乗ろうとする子どもたちと応援するくじらの様子や気持ちを想像することができる。
- ・場面の様子を想像しながら、音読を楽しむことができる。

### ② 実際の授業

|    |                            |
|----|----------------------------|
| T4 | 2場面のところ、みなさんは、「みんなは、大きな声で」 |
| C  | 「おうい。」                     |
| T5 | 「とよぶと、くじらも」                |
| C  | 「おうい。」                     |
| T6 | と言って、「ここへおいでよう。」と言うと、くじらは、 |
| C  | 「ここへおいでよう。」                |
| T7 | そうすると、一年二組のみなさんは、          |
| C  | 「よし、きた、くものくじらにとびのろう。」      |
| T8 | 「と、男の子も女の子も」               |
| C  | 「はりきりました。」                 |

授業初めに2場面を振り返る場面。教師が「みんなは、大きな声で」と本文を読むだけで、「おうい。」と言う子どもたち。その後も、教師が何も言わなくても、自然と役割読みに。お話を楽しんでいる様子がわかる。

|     |   |
|-----|---|
| T9  | で、その時のことを、こんなふうには書いていますよ。(ノートを読む) AAさん。「『よしきた。くものくじらにとびのろう。』のところが、自信たっぷりで言っているんだと思います。」自信たっぷり、どんな顔かなあ。自信たっぷりの顔、やっごらん。   |
| C   | (めいめいに、顔や手で表現)  |
| T10 | おっ、そんな感じね。さあ、AHさんは、「『男の子も女の子も、はりきりました。』空に行きたいという感じで言っているんだと思います。」と書いていますよ。それから、BBさん。「今日、僕は2場面を考えました。本当に、雲のくじらと子どもたちが話をしている、お友達みたいに、空のくじらと子どもたちは思っていると思います。」なるほどねえ。さあ、こんな気持ちで3場面に行きますよ。8ページ開いてごらん。 |

2場面の振り返りノートを紹介する場面。「自信たっぷりに」という言葉を動作化して、その時の子どもたちの思いや様子を想像。また、「『男の子も女の子も、はりきりました。』」という本文の言葉と「空に行きたい」という一年二組の子どもたちの思いを確認。これらの思いを確認しておくことで、3場面での子どもたちの様子や思いをより理解することにつながる。「お友達みたい」という言葉は、2場面でのくものくじらと一年二組の子どもたちの関係を捉えたBBなりの表現。この関係も、3場面に入る前に広げておきたいと考えた。

|     |   |
|-----|---|
| T17 | さて、ちょっとじゃあ、確認していこうかなあ。「みんなは手をつないでまるいわになると」(1回目の「天までとどけ…」を指し)これは、誰が言いましたか。 |
| C   | 1年2組の子どもたちです。   |
| T18 | これは、子どもたちね。(「子」と板書)「とジャンプしました。」とんだのは、どれぐらいでしたか。                           |
| C   | 三十センチぐらい。   |
| T19 | 三十センチぐらい。(線を引く)「もっと、たかく。…」を指し)これは、誰が言いましたか。                               |
| C   | くじら。  |
| T20 | くじら(「く」と板書)。また出てきましたね。(「天までとどけ…」を指し)                                      |
| C   | 子どもたちです。  |
| T21 | そうすると、  |
| C   | く(くじらの意味)   |
| T22 | 何センチぐらいとべましたか。  |
| C   | 五十センチぐらい。   |
| T23 | 五十センチぐらい。(線を引く)   |
| C   | く(くじらの意味)   |
| T   | (「く」と板書)  |
| C   | こ(子どもの意味)   |
| T   | (「こ」と板書)  |
| AA1 | かぜ。   |
| T24 | (「かぜ」を四角で囲む。)かぜ。  |

1年生は、同じようにお話を読んでいても、誰が何を言ったのか、どのような場面なのかを理解できていないことがある。何がどうなったのか、誰が言ったのかを一つひとつ丁寧に確認した上で、場面の様子や登場人物の気持ちを想像していくことが、深い読みにつながっていくと考える。ここでは、「三十センチぐらい」「五十センチぐらい」という変化、そして、この場面での重要な役割を果たすAAが発した「かぜ」をチェックする。協働学習の際の子どもたちの一助となると考える。

|      |   |
|------|---|
| AG9  | 「もっとたかく。」のところが、2回目の「もっともっとたかく。」のところが、くじらが、僕は来れないから、一生懸命来てという感じがします。 |
| T28  | 2回目のほうね。2回目のほうね。BHさんどうぞ。  |
| BH10 | 「くじらがおうえんしました。」のところが、本当にくじらが応援しているように伝わってきます。AZさんどうぞ。               |
| AZ11 | 「みんなは手をつないでまわるいわになると」のところが、どうやって雲のくじらに乗ろうかと考えたと思います。BIさんどうぞ。        |
| BI12 | 「天までとどけ、一、二、三」の全部のところが、空まで届いてお願いって、心で言っているのが伝わってきました。AHさんどうぞ。       |
| AH13 | 「手をつないだまぐものくじらに乗っていました。」っていうところが、どこに行こうかなという気持ちが伝わってきます。ATさんどうぞ。    |
| AT14 | 「もっとたかく、もっとたかく。」のところが、くじらが、もうっと、もうっと、もうっと高く来てほしいです。                 |
| T29  | ちょっと止めていいですか。今、ATさんは、「もっと高く、もっと高く」のところのことを言いましたね。何回、出てきましたか。        |
| C    | 2回です。   |
| T30  | AGさんはね、「2回目のほうが。」と言いましたね。同じ言葉があるので、先生、今どっちのこと言っているのかなと思ったんです。どっちかな。 |
| AT15 | 2回目です。  |
| T31  | 2回目のところのほうが、・・・もう一度言ってください。   |
| AT16 | もうっと、もうっと、高く…。  |
| T32  | (「もうっと、もうっと、たかく」と言いながら板書)。今みたいに、言ってくれると助かりますね。                      |

お話の中に、「もっと高く、もっと高く。」「天までとどけ、一、二、三。」という文が繰り返し出てくる。同じフレーズであっても、くものくじらや一年二組の子どもたちの気持ちには変化があると考えるので、何回目のかを発言しているのかは非常に重要になってくる。しかし、AG9の発言までは、何回目の文かがわからない発言だった。AG9が「2回目の・・・」という発言を受け、T28でこのような発言をしてほしいという思いで繰り返す。ところが、その後も、何回目のフレーズかをうまく伝えることができない発言が続いた。AT14の発言で、「・・・もうっと、もうっと、もうっと・・・」という自分なりの表現には、AT14が伝えたい思いが詰まっているのがわかる。それを正しく伝えられるようにするために、T30で支える。AT14は、1回目ではなく、2回目だから「もうっと、もうっと、もうっと」という表現になったのだろう。

|      |  |
|------|--|
| AA24 | 3回目の「天までとどけ、一、二、三。」のときが、2回目の「天までとどけ、一、二、三。」こんどは、五十センチぐらいとべました。」のところが、「そのとき、いきなりかぜがふきました。」のところが、前からずっと頑張っていたから、風がみんなを空に吹き飛ばしたと思います。AGさんどうぞ。 |
| AG25 | 「やっと三十センチぐらいとべました。」のところが、がんばっても、がんばって三十センチぐらいとべている感じがします。ASさんどうぞ。  |
| AS26 | ほくが、不思議に思ったのは、三十センチ飛んだあと、落ちて五十センチ飛べたのか、そのまま五十センチ飛べたのかわかりません。ALさんどうぞ。   |
| AL27 | 「手をつないだまぐものくじらにのっていました」が、くじらのいいところに連れて行ってあげようという気持ちが伝わってきます。APさんどうぞ。   |
| AP28 | 3番目の「天までとどけ、一、二、三。」が、本当に遠くまで、くじらに飛び乗ろうと思ったと思います。AIさんどうぞ。   |
| AI29 | 「手をつないだまぐものくじらにのっていました」のところが、みんなで力を合わせてあきらめなくてよかったという感じがわかります。BLさんどうぞ。   |
| BL30 | 「三十センチぐらいです。」のところが、がもっともっと高く、とびたいと思っています。AOさんどうぞ。  |
| AO31 | 3回目の「天までとどけ」のところが、「天までとどけ」のところが、力こめていっぱい、思い切ってジャンプする気持ちにして、「一、二、三。」は、ジャンプできるかなと思って・・・。   |
| T35  | 「一、二、三。」がジャンプするところ？  |

|      |   |
|------|---|
| AO   | (うなずく)  |
| T36  | 「ああ、『一、二、三。』(三を強く)でジャンプしたってこと?  |
| AO   | (うなずく)AXさんどうぞ。  |
| AX32 | 「あっというまに」のところが、「あっというまに」が速い感じがします。AJさんどうぞ。  |
| AJ33 | 「五十センチぐらいとべました。」のところは、もっとがんばらなくっちゃと思っています。AGさんどうぞ。                                |
| AG34 | 「手をつないだまま、先生と子どもたちは」のいうのが、一生懸命頑張ってあきらめないでやったから、やっと乗れたんだという気持ちが伝わってきます。BGさんどうぞ。    |
| BG35 | 1回目と2回目の意味は、絶対に違うと思います。   |
| T37  | 1回目と2回目の何が違うの?  |
| BG36 | 「天までとどけ」の意味が、絶対ちょっとだけ変わっていると思います。   |
| T38  | どう違うか教えてほしいなあ。  |
| BG37 | 最初は、がんばる勇気があったけど、もっとあれしたら、もっとどんどんどん力がいってくるのが違うと思います。                              |
| T39  | あっ、ここが(1回目)勇気があった。で。  |
| C    | あっわかった!   |
| T40  | 先生が聞いている。先生がお尋ねしてる。BGさん答えられる。もう少し詳しく教えてください。                                      |
| BG38 | 最初は、もっとがんばろうと思っていたら、どんどんどん、もっともっともっとってがんばるようになっていきますから、変わっていると思います。AFさんどうぞ。       |
| T41  | は、は、は、は、は。  |
| AF39 | 1回目の「天までとどけ、一、二、三。」のところが、がんばっているような気持ちが伝わってきます。AZさんどうぞ。                           |
| AZ40 | 2回目の「天までとどけ、一、二、三。」は、1回目より、もっと高くジャンプするぞという感じが伝わってきます。AXさんどうぞ。                     |
| AX41 | 「あっというまに」は、全部3回したから速く…。   |
| T42  | ほう。   |
| AX42 | AGさんどうぞ。  |
| AG43 | 3回目の「天までとどけ、一、二、三。」は、がんばるぞという気持ちが伝わってきます。BDさんどうぞ。                                 |
| BD44 | 3回目の「天までとどけ、一、二、三。」のところが、2回目よりももっともっともっと高くとぶぞっていう気持ちが伝わってきます。AIさんどうぞ。             |
| AI45 | 「いきなり、かぜが空にみんなをふきとばしました。」のところが、みんなが、やっといけたかと思ったと思います。                             |
| T43  | ほう。あと一人当ててください。   |
| AI46 | BKさんどうぞ。  |
| BK47 | 「いきなり、かぜが空にみんなをふきとばしました。」のところが、くじらが、風で3回目もできなかったら、風をよんで風で雲のくじらに乗せてあげようって思ったと思います。 |

協働学習では、子どもたちの考えは順番には出てこない。しかし、よく聴いてみると、しばらく前に出た子の考えをよく聴いていて発言されることが多々ある。これを「ここから考えましょう」と順序立ててしまうと子どもたちの想像はせまいものになってしまうと考える。その時の子どもたちの考えていることを大事に、協働学習を進めるほうが、より豊かに想像していくことにつながっていくと考える。

③ 本時の板書 (図4)

あらかじめ地の文(白)を板書しておく。授業の中で出てきたことは、色チョークを活用している。このお話では、子どもたちの思いは黄色、くじらぐもの思いは青で色分け。色を分けることで、それぞれの気持ちの変化が見えるかできるのではないかと考えた。また、着目してほしい言葉や子どもたちが自分の言葉で想像を膨らませた登場人物の気持ちは、赤で書いた。

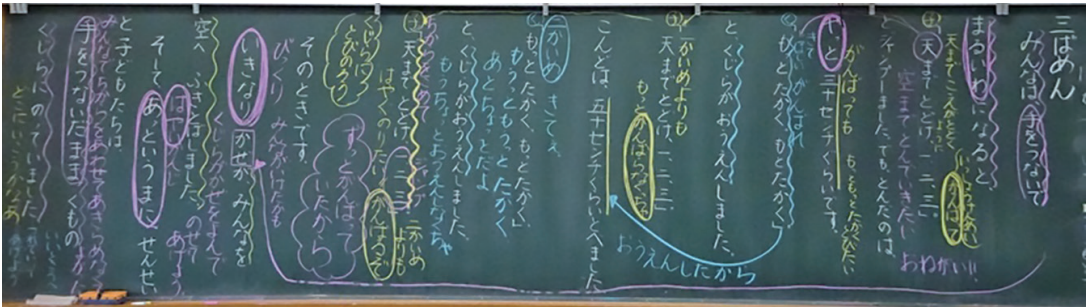


図4 本時の板書

## 6. 授業を終えて

協働学習が始まると、子どもたちが次々に自分が想像したことを伝えて出す。「～のところで…」という発言は、書かれている文や言葉を根拠に、お話を想像していることの現れである。このような発言になるのは、ひとり勉強をしているからだだろう。ひとり勉強でしっかりと子どもたち一人ひとりがお話と対話をする中で、自分の考えを持つことができる。しかしながら、自分の考えを言いたい気持ちでいっぱい1年生。自分の考えを言っただけで終わってしまうと、協働学習の意義は薄れてしまう。協働学習では、お互いが考えを聴き合いながら、自分の考えをより確かなものにしたり、新たな気づきからより考えを深めたりできる学習であってほしい。

授業記録を分析してみると、子どもたちの考えがつながっていることがより見えてくる。特に、BG35の「絶対に違うと思う」という発言以降の子どもたちが、それまでの発言を集約するかのようにつながりながら、読みを深めていることがわかる。BG36～BG39までの発言の中で、登場人物が回を重ねるごとに思いを強くしてきていることを、自分の言葉で説明しようとしている。この発言を受け、AF39、AZ40、AG43が、1回目より2回目、2回目より3回目の思いの変化をつなげていく。さらに、BD44がそれをまとめたように表現し、そんな思いを汲み取るかのような協働学習の最後の発言BK47。「3回でもできなかったから」と深まっていく。

このように振り返ると、T29で教師が子どもたちの発言に対し、何回目かをわかるように発言を求めたこと、BG35の発言に対し、T37「1回目と2回目の何が違うの？」と問い返し、BGの思いを引き出そうとしたことが、読みの深まりへとつながったのではないかと考える。また、協働学習の一番初めにAA1が「かぜ」と言った一言を、板書に位置づけたことも、BK47の発言へと結びついたら、大変有効だったのではないだろうか。

しかし、子どもたちの考えを教師がきちんと受け止められていないところも見えてくる。例えば、AAは一番初めに「かぜ」と言っているが、その後AA24でも「前からずっと頑張っていたから、風がみんなを空に吹き飛ばした」と発言している。この発言の「ずっと」という言葉から、登場人物の雲のくじらにとび乗りたいという思いの継続を表していると分かる。だから、「かぜが」と言っていたのだろう。しかし、授業内では、この発言でのAAの思いを汲み取ることができなかった。

同様に、AXは、AX32で「『あっというまに』のところが、速い感じがします。」と言い、AX41でも「『あっというまに』は、全部3回したから速く」と「あっというま」という言葉を大事に読み取ろうとしているが、このことも、授業記録を振り返って初めて気づくことができた。

本時では、子どもたちがお話に書かれている言葉や文を大事にしながら想像を膨らませようとしている姿を見ることができた。また、自分が想像したことを自分の言葉で表現し伝えようとする姿も見られた。教師が、お話に出てくる大事な言葉に着目し、意識しながら授業を進めた一つの成果ではないだろうか。

しかし、本時の授業の中で、子ども一人ひとりの読みのこだわりをとらえることができていなかったことに気づけた。協働学習において、教師が、いかに子ども一人ひとりの読みや子ども同士の間をつなぐかを理解し、授業の中でどのような関わりをしていけるのかが課題である。



## 7. 本実践についてのコメント

### —主体的・対話的で深い学びを実現する国語科学習指導—

#### ① 主体的・対話的で深い学びとは

帝塚山小学校では、主体的・対話的で深い学びについて、次のような学習者の姿ととらえている。

主体的な学び…「読みたい」「書きたい」「話したい」「聞きたい」など、学びに向かう。

対話的な学び…教材と対話しながら学習を進める。自分の考えを伝え合う。

深い学び…自分の考えがより確かなものになったり再構築されたりする。

新たな問いや気づき生まれ、学びが連続していく。

#### ② 主体的・対話的で深い学びを実現するための指導の工夫

本実践では、言葉や挿絵から想像を膨らませて音読する言語活動を設定している。音読には、自分の理解を確かめる働きと自分が理解したことを表出する働きがある。教材文の言葉や挿絵に着目して、想像を膨らませ読み取ったことを表現していくことを通して理解を確かめている。そのために、実践における指導の工夫について、次の3つを示している。

##### ・音読と動作化（主体的な学び）

音読…楽しみながら主体的に学ぶことができるように、一斉読み、グループ読み、役割読みなどを取り入れている。

動作化…全身を使って物語を演じながら、主体的に気持ちを想像することになる。

##### ・ひとり勉強（対話的な学び）

教材文を読み込んで自分の読みを生み出し、ワークシートやノートに書いている。

登場人物の心の声を想像しやすいように吹き出しの中に書き込める形式のワークシートも活用し、ステップを踏みながら、より言葉に着目できるようにしている。

##### ・振り返り（深い学び）

どのように想像したのか、どのようなことを考えたのか、学んだことをメタ認知させている。

#### ③ 板書による思考の可視化を使った主体的・対話的で深い学び

ひとり勉強において読み取ったことを協働学習において伝え合ったことは、板書に整理されている。図4のように、教材文を白色、子どもたちの思いは黄色、くじらぐもの思いは青色、着目してほしい言葉や想像を膨らませた言葉は赤色で示し、学習者の思考を可視化している。学習者の意見を取り上げて書くことにより、学習者が主体的に関わることになる。さらに、自分の意見と他の意見を比べたり、言葉に着目したりしながら、さらに思考を深めていく手立てとなっている。他の場面においては、挿絵を貼ったり、吹き出しに学習者が想像した言葉を書いたりと視覚に訴え、理解の促進を図っている。

このように、指導者は、思考を促すために何を示すのか考えて、構造的に板書に示す必要がある。

#### ④ 教材研究の重要性

本実践に当たっては、指導者が作家研究（作者の中川李枝子さんについて）・作品研究（お話「くじらぐも」の魅力について）を行い、作品を深く読み込んでいる。それを踏まえて、図5のように、本文を視写し、情景を書きこみながら学習者に着目させたい言葉を捉え、想像を膨らませるために必要な言葉をおさえながら発問を考えている。丁寧な教材研究に支えられた豊かな実践が展開されたことが伝わってくる。

10

「もつとたかく。もつとたかく。」  
と、くじらが おうえんしました。  
「天までとどけ、一、二、三。」  
そのときです。

9

「もつとたかく。もつとたかく。」  
と、くじらが おうえんしました。  
「天までとどけ、一、二、三。」  
くじらには、五十七センチぐらいとべました。

11

「もつとたかく。もつとたかく。」  
と、くじらが おうえんしました。  
「天までとどけ、一、二、三。」  
くじらには、五十七センチぐらいとべました。  
空へ  
「あ」といふまに、  
せんせいと子どもたちは  
手をつないだまま、くもの

※まずは、本文を視写する。その上で、教師自身がお話に向き合い、想像を膨らませていく。作者の思いや浮かんでくる情景などを書き込む。そして、授業の中で、想像を膨らませるために着目させたい言動や言葉をとらえていく。

図5 第三場面の教材研究ノート

今後の課題として、「一人ひとりの読みのこだわりをとらえること」が記されている。事前にワークシートやノートを確認し、把握していくなど、工夫を重ねる必要がある。